

様式第2号

視察研修先	栃木県大田原市	氏名	安孫子義徳
視察研修項目	旧蜂巢小学校の利活用について（多機能型障害施設サービス事業所）		
大田原市は、栃木県の北東に位置し、人口約7万人で那須野が原の扇状地と八溝山系の山間部にまたがる地域である。 清流的那珂川と箒川が流れ、日本有数の鮎の漁獲量を誇る。田園工業都市として発展し、アスパラガスや和牛などの農業も盛んで、観光スポットも多数ある。また、日本最古の碑である国宝の「那須国造碑」など多くの史跡が存在し、古代から住民が生活してきた長い歴史をもち、江戸時代より受け継がれた城下町を礎として、現在は、政治、経済、文化など様々な分野において、県北部の中心都市の役割をはたしている。 視察目的 廃校となった旧校舎を地域資源として再生した先進事例を確認し、本市における廃校活用方針（民間活力の導入、地域連携、雇用・福祉効果等）に活かす実践的な示唆を得ることを目的とする。 施設概要 ・ 建築年：昭和7年（木造校舎）等、長年の歴史をもつ校舎をリノベーション。 ・ 廃校年：平成24年度。 ・ 事業開始：平成28年度 ・ 運営主体：社会福祉法人エルム福祉会による多機能型障害福祉サービス事業（カフェ運営、コーヒー豆・焼き菓子等の製造販売）。施設の一部は地域利用（ギャラリー、ワークショップ等）へ開放。 ・ 改修の特徴：既存の木造校舎の構造や意匠（黒板、机、建具等）を活かしつつ、天井を抜いた吹き抜け空間や採光を重視した設計により明るく居心地の良いカフェ空間に改修（第28回マロニエ建築優秀賞受賞） 視察で確認した運営・事業面のポイント 1. 複合的な事業モデル：障がい者就労支援（就労機会の創出）を主軸に、飲食（カフェ）、成果・焙煎商品販売、イベント・地域開放を組み合わせることで収益と社会効果を両立している。 2. 地域交流の場としての機能：教室や体育館がギャラリー・ワークショップ等に活用され、地域住民や観光客を引き寄せる拠点になっている。これにより周辺商業や観光への波及効果が見られる。 3. デザインと保存の両立：木造の歴史的建築性を尊重しつつ安全性・利便性を向上させる改修手法が採られており、高い評価（建築賞）を獲得。観光資源・滞在価値			

の向上に寄与している。

成果と効果

- ・雇用・福祉面：障がい者の就労支援と雇用の創出。就労支援→実務への繋ぎとなる仕組みを構築している。
- ・集客・知名度：県内外からの来訪者があるほか、メディアでの紹介や観光協会等の情報発信により集客効果が確認できる。これが地域の賑わい創出に繋がっている。
- ・維持管理：民間事業者が主体的に改修・維持を行うことで市の維持負担を軽減し、長期的な利活用が可能となっている。

所 見

旧蜂巢小学校の利活用は、廃校を福祉と地域交流の拠点として再生した好事例であり、障がい者の就労支援と地域の賑わい創出を両立している点が印象的であった。古い校舎のぬくもりを残しながら新たな価値を生み出しており、地域資源を活かすとはこういうことだと感じた。

本市でも、廃校活用を進める際には、単なる施設の再利用ではなく、人が集い関係が生まれる場づくりを意識した取組が求められると考える。

様式第2号

視察研修先	栃木県那須町	氏名	安孫子義徳
視察研修項目	旧朝日小学校の利活用について（那須まちづくり広場）		
那須町は、栃木県の最北端に位置し、人口は約2万3千人、首都東京からは約170キロメートルにあり東京から仙台間の中間に位置している。 那須連峰と八溝の山並みに広がる町は、北西部に那須連山の主峰、茶臼岳（1915メートル）がそびえ、今なお煙を吐き続けている。その南斜面には、1390年の歴史を持つ温泉があり、日光国立公園「那須温泉郷」として観光の名所となっている。山麓地帯には、別荘地やテーマパークがあり高原地帯には、傾斜地を利用した酪農が続き、中央・東部地区には、水田地帯が広がっている。また、南東部の伊王野・芦野地区には源義経に始まり、俳人松尾芭蕉に至るまで多くの史跡があるほか林業・石材業の町として発展を続けている 視察目的 全国的に廃校の活用が課題となる中で、那須町では旧朝日小学校を福祉施設として再生している。教育施設が地域の福祉拠点として新たな役割を担う事例として、運営形態や地域連携のあり方を学ぶことを目的に視察を行った。 概要 旧朝日小学校は、閉校後に社会福祉法人へ貸与され、現在は多機能型障害福祉サービス事業所として運営されている。校舎を大きく改修することなく活かしながら、就労支援（B型）や生活介護を行い、地域住民との交流イベントも積極的に実施している。教室だった空間が、今は利用者の作業場や憩いの場として生まれ変わっている点が印象的であった。 運営体制 町が建物を所有し、社会福祉法人が指定管理を受けて運営。補助金に頼りすぎず、農産物や製品の販売など自主事業による収益確保にも取り組んでいる。地域ボランティアの関わりも深く、行政・法人・地域の三者連携がしっかりと機能している。 成果 ・廃校と福祉と地域交流の拠点として再生。 ・障がい者の社会参加と地域との共生を実現。 ・旧校舎を活かした温もりのある環境づくり。			

課題

- ・ 建物の老朽化に伴う維持・修繕費の負担。
- ・ 支援人材の確保と送迎体制の継続的な課題。

所 見

この取組から強く感じたのは、「廃校活用の成功は、地域が主役になること」だという点である。行政がすべてを担うのではなく、地元の法人や住民が自ら動き、行政はそれを支える立場に回る。その姿勢が、結果的に施設の継続性を生み出していた。

本市でも廃校施設の活用は避けて通れない課題である。単なる貸与や一時的利用にとどまらず、福祉や地域づくりの拠点として「人が関わり続ける仕組み」などをどう構築するかが鍵だと改めて感じた。

様式第 2 号

視察研修先	宮城県白石市	氏名	安孫子義徳
視察研修項目	学びの多様化学校（白石きぼう学園）について		

白石市は、宮城県の南に位置し、人口は約 3 万人である。東京から 2 時間、西に蔵王連峰を擁し、阿武隈川の支流である白石川の清流など四季折々の豊かな自然に恵まれている城下町で、東北新幹線、東北自動車道などの高速交通網により、流通インフラが整備された産業都市としても発展している。また、観光資源も豊富で、白石城の復元や、小原・鎌崎温泉・白石温麺や弥次郎こけしなどの特産品も有名である。

視察目的

不登校児童生徒への支援や、学校以外の学びの場の充実が全国的な課題となる中、白石市が設置した「学びの多様化学校・白石きぼう学園」における子ども一人ひとりの学びを支える具体的な取組を調査し、今後の本市における不登校支援および多様な学びの推進施策の参考とすることを目的とする。

施設・事業の内容

白石きぼう学園は、令和 5 年 4 月に開設された学びの多様化学校である。本校は不登校状態にある小・中学生を対象に、子ども一人ひとりのペースや興味に合わせた柔軟な学びを提供することを目的としている。

旧白石南小学校・白石南中学校校舎を改修して使用しており、普通教室のほか、個別学習室、創作スペース、カウンセリングルーム、談話コーナーなどを整備。ICT 機器を活用したオンライン学習や、地域と連携した体験活動も行われている。

運営体制と学習支援

- ・在校生（小・中学校）との連携を図り、学習内容の共有や出席扱いの取扱いなどを学ぶ。
- ・児童生徒は個別の学習計画に基づき、登校・オンライン・家庭学習を組み合わせで学ぶ。
- ・学校復帰を目的とせず、子どもが自分のペースで安心して学び・社会とつながることを重視している。

成果と課題

成 果

- ・登校に不安を抱える子どもが、安心して通える居場所になっている。
- ・地域のボランティアや企業との連携により、社会体験や就労準備教育が進んでいる。

課 題

- ・運営人材の確保と継続的な財政支援が課題。
- ・学びの成果を客観的に評価する方法の確立が求められる。
- ・他市町村との連携や受け入れ範囲の明確化など、制度的整理が必要。

所 見

白石きぼう学園の取り組みは、子ども一人ひとりの状況に応じた柔軟な学びを提供する先進事例であり、運営体制が効果的に機能していると感じた。

本市においても、不登校児童生徒への支援や多様な学びの場の充実を検討する際に、同校の仕組みや運営方法を参考にできると考える。